

IWATE 教育総研ニュース

No.10 2022.1.26

岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所〒020-0022
岩手県盛岡市大通一丁目1-16
岩手教育会館4F 岩手県教互センター内
TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535
E-mail:j.sato8252@gmail.com

リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



教育の場に一次産業との接点を

て づか か
手 塚 さや香フリーランス
(ライター、キャリアコンサルタント)

2014 年秋に釜石に移住したのは、釜石地方森林組合が取り組もうとしていた人材育成事業の運営をサポートするためだった。東日本大震災で被災し役職員 5 名を亡くした森林組合は、震災後、新たに 10～40 代の男女 9 名（その後 2021 年春までに計 17 名）を雇用した。職員のスキルや知識の向上とともに、雇用を支える魅力的な仕事として林業を地域に根づかせたい、という森林組合の高橋幸男参事の思いを知ったパークレイズグループ（イギリスに本社を置く金融機関）が支援を決め、その後 5 年間にわたる「釜石大槌パークレイズ林業スクール」が始まることとなった。

森林組合は、森林の所有者が組合員であり、職員は間伐（間引き）を中心とした森林整備作業を行い、伐り出した販売の売上から組合員に利益を還元するのが本業だ。2014 年当時、復興工事のための伐採作業などで多忙を極めていた森林組合には、新しい事業に人手を割く余裕はなく、「釜石リージョナルコーディネーター（釜援隊）」の一員として投入されたのが私だったという経緯だ。

スクールのキャッチフレーズは「地域の森林を

略
歴

- 2001年 立教大学卒
毎日新聞入社
(盛岡支局、東京本社学芸部、大阪本社学芸部勤務)
- 2014年 毎日新聞を退社
釜石リージョナルコーディネーター(釜援隊)協議会所属
- 2021年 釜援隊の活動終了に伴い独立、フリーランスのライター、キャリアコンサルタントとして活動
岩手県東日本大震災津波復興委員会女性参画推進専門委員会委員
岩手県森林審議会委員

デザインする力を身につける」。これは、伐採など技術の取得だけではなく、地域の気候や地質、生育しやすい木の種類など森林にまつわる総合的な視点を持った上で、環境や組合員の利益まで考えられる人材を育成したい、という高橋参事の思いを凝縮させたものだ。

支援期間中の 2015～19 年の 5 年間に東京、北海道、広島など全国から計 115 名が釜石に集いスクールを受講した。この受講生の数自体は、関係者の間で設定した目標に近かったが、スクール修了後に新たに釜石・大槌地域で林業に就いた人の数を数えると、片手で足りるほどだった。

毎年、1 人でも多く地域の人たちに受講してもらうため試行錯誤したが、集まってくるのは内陸部や県外在住で、すでに大なり小なり林業や森林について知識を持っている、いわばすでに「アンテナを立てている」層が多かった。そして、彼らの多くは自身が拠点とする地域（または出身地）の森林をもっと良くしたい、という思いを持ってスクールに臨んでいた。

森林組合の職員や地域の林業者に受講機会を提

供できたこと、そして全国の受講生とのネットワークが今も続いていることの意義は決して小さくはないが、数字だけで見ると、地域の新たな林業者を多数育成できたとは言い難かった。



写真提供:手塚さや香さん

釜石で働くうち、地域の人たちに森林や林業に興味を持ってもらう、ということが予想以上に難しいことを実感した。「鉄と魚とラグビーのまち」である釜石や水産加工業が根付いている大槌で、林業に「アンテナを立てている」層というのは限りなく少数で、私たちは地道にアンテナを建設するところから始めなくてはいけない、つまり、もっと地域の子どもたちに森林や林業について伝え興味を持ってもらうことに力を注ぐべきだと実感するようになっていった。

そこで、スクール運営と並行して、高橋参事とともに釜石市内の校長先生の会議に赴き、森林組合で体験できる植樹活動や学ぶことのできるテーマを紹介させてもらったり、木製品の寄贈を通じて親交のできた学校を訪問し、森林での作業体験を提案するなど、学校教育の中に取り入れてもらえるようアプローチした。

その成果というわけではないが、時期を同じくして、県沿岸広域振興局がコーディネートする職場体験事業や、市内の県立釜石高校と釜石商工高校とを対象にしたキャリア教育「釜石コンパス」、釜石高校のスーパーサイエンスハイスクールなどを通じて学校現場と接点を持つ機会が増えてきた。

中でも 2016 年から始まった釜石コンパスは、世界的な金融機関 UBS グループと釜石市との協働宣言に基づいたキャリア教育で、地域の事業者の若手社員から外資系企業の幹部まで多種多様な社会人と高校生とが、少人数のグループで双方向のコ

ミュニケーションを取りながら、仕事への向き合い方やキャリアについて考えるプログラムだ。

その講師として森林組合の高橋参事や若手職員も高校生たちとの対話の時間を持った。対話を通じて、林業は「木を伐る仕事」というイメージを持っていた高校生が、伐って植えることにより木だけではなく土壌を作り環境や防災に貢献する仕事だということを知った、という感想を寄せてくれることもあった。

このプログラムのユニークな点は、その職業に興味がある生徒だけでなく、興味がない生徒とも対話の時間が持てることだ。林業や森林にアンテナを立てていない生徒と偶然に出会い対話することによって、その生徒が林業という職業を選ばないにしても、何かの折に林業が地域の環境に貢献していることを思い出してくれるかもしれないし、近くの森林に少しは興味を持ってくれるのではないかと思う。

小学生の職場体験もまたしかりで、職員と一緒に重機を操作したり仕事の話の話を聴いたりした後に学校の裏山を見ると、少し違った景色が見えるのではないかと期待している。

林業を含めた一次産業の大きな特徴は、“自然”に働きかけてものを生み出す点であり、その仕事地域に環境に影響を与えるという点だろう。だからこそ従事する当事者以外の人たちにも関心を持ってほしいし、将来の担い手を育成する責任もある。

釜援隊としての活動は終わったが、地域住民のひとりとして、地域の子どもたちと森林や林業とをつなぐきっかけを増やしていきたいと思っている。



写真提供:手塚さや香さん



学力テスト問題を考える

2021.12.5活憲いわての会主催

第5回佐高信文化塾

『学力テスト今昔』報告

2021年12月5日に、活憲いわての会（日本国憲法を護り活かすことを目的として活動している団体）主催の「佐高信文化塾」今年度第5回学習会が、『学力テスト今昔』と題して岩手県教職員組合・岩手教育総合研究所の担当で開催されました。

当日は、岩教組副委員長の八重樫千晶さんから現在行われている学力調査の問題を、岩教組OBの小山田幸郎さんから1961年当時の全国学力テストの状況や問題をそれぞれ報告してもらい、悉皆で行われる学力テストが子どもたちの教育にどのような影響を及ぼすかについて理解を深めました。

以下に、学習会のようすについて、概要を報告したいと思います。



(1) 八重樫千晶さん（岩教組副委員長）による現在の学校現場の状況報告から（要約）

- ・「全国学力・学習状況調査」実施後のアンケートからは、点数を上げるための事前練習が繰り返されている問題状況がうかがえる。
- ・学力調査実施の圧力によって、本来大切にされるべき子どもたちの多様な能力よりも表面的な点数学力が重視され、教育が歪められる状況が強まっている。



- ・全国学力調査を通じて教育への権力の介入が進んでおり、またオンラインでのテスト形式の導入が想定されることから、教育の商業化が進むことも懸念される。

(2) 小山田幸郎さん（岩教組OB）のお話から（要約）

- ・学力テストは旧文部省によって1956年から抽出で行われていたが、61年から全国一斉テストとして中学校2・3年生を対象に悉皆で実施された。
- ・その目的は、①教育課程や指導の改善、②学習到達度の把握と全国比較、③教育諸条件の改善、④能力・心身発達の遅れの把握と指導要録への記載・・・などとされた。
- ・当時、日教組は行政による教育支配につながると実施に反対し、岩教組も強力な反対運動を展開した。



- ・1961年10月26日実施当日は、「平常授業を行う」という方針を掲げ、実施をせまる教育委員会と対立しながら、308校で完全阻止、39校で完全実施、20校で一部実施となり、実施率は全国平均94%に対して本県は12%と全国最低だった。
- ・12月には、岩教組6支部の役員ら12人が逮捕され、続いて小川委員長始め本部役員9人も逮捕されたが、盛岡地裁は9人の拘留請求を却下し、全員釈放された。その後県教委は、学力テスト拒否の責任者として、免職9人を含む802人の行政処分を行った。
- ・裁判は、盛岡地裁で有罪、仙台高裁で無罪、最高裁で有罪となったが、仙台高裁では、「教育が点取り競争に陥る危険性」や「詰め込み教育の弊害の心配」、「教育の形式化が進むことへの懸念」などが指摘された。
- ・指摘されたこれらのことから、現在の学校教育ではどうなっているのだろうか。
- ・全国学力テスト実施の背景には、当時の池田内閣の「所得倍増計画」が大きくかかわっており、政府として優秀な働き手を都市部に送り出すための“子どもたちの選別的手段”という側面があった。全国学力テストが子どもたちや地域のためではなく、政治や経済のためであり、本来の教育の姿を疎外するものだった。
- ・当時、岩手の農山村では、家計を支えるために多くの子どもたちが農業などの家の仕事の手伝いを行っており、生活も大変な苦労が多かった。
- ・学力テストの問題を地域や親に説明したところ、「今の生活を改善することが先で、学力テストには反対だ。」「成績上位の子どもたちが都会に行ってしまうのでは地域が成り立たなくなる。」など、切実な意見や多くの疑問が寄せられ

た。この意見交流が学力テスト反対闘争の大きな原動力だった。

小山田さんから当日資料として配布された『岩手の教育物語・下巻』68～75Pに記載された当時の関係者の声の一部を再録します。

「学力テスト実施の主目的は各中学校のレベルをつかむことにあり、この点については、前年のテスト実施でじゅうぶん掌握されていると聞いています。そのほか単なるテスト実施だけでなく、家庭の経済状況や心身障害状況まで記入する付表があるそうですが、せっかく民主教育がほどこされている現在、なにか時代に逆行した官製教育みたいな感じをうけ、今回のテストには反対意見です。(略)」(「岩手日報」S36.10.23)

「岩手県の学力テスト闘争は、私にとって全く新鮮なショックだった。(略)岩手の学テ闘争の特徴は、教師が教育をする権利、子どもの教育を受ける権利を、はっきりと正面におしたて、校長も現場も一致して子どもを守りぬいたことだった。(略)いうまでもなく、岩手県は決して恵まれた富裕県ではない。先生方は不十分な教育条件の中で日常活動に苦勞すると同時に、子どもたちの就職、進学に心を痛め、また都会地へ働きに行った卒業生のその後を思い煩っている。(略)「こんな教育条件のわるいところで、その改善にはちっとも手をつけなまま一斉学力テストをやられたら、岩手の子どもたちは可哀そうだ。そんなばかなことをさせられるものか」という声を、私はいたるところで聞かされた。県教組の役員も、分会の現場教師も、この点では少しの違いも感じられなかった。単なる評価の不合理というばかりでなく、独占資本の要求にあわせて配分しようとする学力テストの本質を、岩手の先生がたはいちばんよくわかる状態にいたのである。」(略)(山家和子・評論家「教育評論」S37.1月号)

約60年前のできごとと、それにまつわるお話を聞きながら、現在の学校をめぐる問題状況と、これからの未来の学校のあり方について、改めて子どもたちを中心において考えていくことの重要性を感じる機会になりました。

(岩手教育総合研究所 佐藤淳一)



教室の窓から



信頼の扉

2009年度末の人事異動で転勤の予定だった私は、内示の少し前に校長室に呼ばれた。校長から事前に告げられたのは、県立のT学園内に、2010年4月に開校する予定のH分校に行ってくれないかというものだった。

T学園の歴史は古く、明治41年に盛岡市内の仏教各宗寺院37カ寺の住職方によって感化院として開設され、その後法改正によって教護院の時代を経て、1998年の児童福祉法の改正によって児童自立支援施設となった。

実は、98年の法改正当時「学校教育の義務化」は打ち出されていたものの、県教委とM市教委の間で県立の施設への小中学校設置に関わる調整がなかなか進まず、2010年度からK中学校とM小学校の分校として開校することになったのだった。私の若い頃は、退職した教員が何人か講師として勤め、「学校教育に準ずる教育」の形で授業が行われていたが、ようやく正式な学校設置となり、その最初の教職員の1人として配置されることになったのだった。

学園に入所して来る生徒たちは何らかの課題を抱え、児童相談所や家庭裁判所の措置によって入所して来る。そして、寮生活をしながら自立のために必要な生活経験を積むとともに、学校教育を受けることになるのだった。以前は、いわゆる「ツッパリ」の生徒たちが多かったのだが、私が転任した頃は、入所するほとんどの生徒たちが、家庭環境の悪化等によって様々な問題や課題を抱えている状況であった。

私が3年間で担任した生徒たちは、生まれてから乳児院を始めに施設5ヶ所めの生徒、家庭内の虐待やネグレクトで保護された生徒、前の学校で怠学や家庭内暴力等の問題があった生徒、前の施設で女子生徒に性的いたづらをしてしまった生徒、大人に性的いたづらをされた生徒、1ヶ月ぐらいの間親に食事の世話をしてもらえず万引きしてしまった生徒・・・など、実に悲惨な状況下で課題を抱えざるを得なくなった生徒たちであった。

私は、1年目に中学2年生の担任になったが、4月の時点でそのクラスにはSという女子生徒が1人在籍していた。初めて教室に入った時、そのSは、普通の学校の教室の3分の1ほどの教室の後ろの壁に自分の机とイスをくっつけて、不機嫌そうに座っていた。私がいろいろと話しかけても、答えが返ってこない。その状況は、それから2ヶ月ほど続くことになった。

2週間経ってもなかなか話をしてくれないSに困った私は、彼女を担当している施設職員に相談した。

「Sがなかなか話してくれないので、正直言って困っています。」

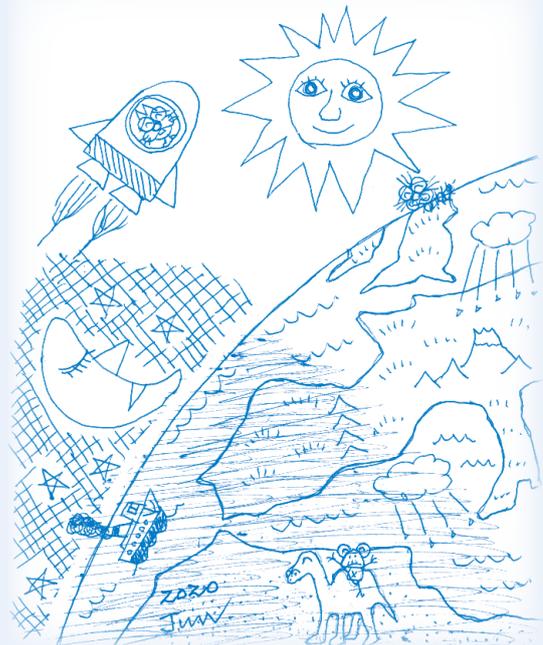
「彼女は、施設に来た時から大人に対する強い不信感があって、特に安心できる関係が作れないうちは警戒心が強いです。」

「どうしたらいいんでしょう?」

「じっくりと、関係ができるのを待つのがいいと思いますよ。」

「こんな状態で大丈夫でしょうか?」

「でも先生、去年の後半の彼女は、寮の部屋に籠って登校しなかったので、学校に来てただけでまだいいんじゃないでしょうか。来てるってことは、何か期待を持っているってことかもしれませんし・・・。」



2 か月ほど経ったある日、私の心配はあっけなく解消することになった。ある日、児童相談所から「来週、中学 2 年生の男子生徒が入所になる」との連絡が入ったのだ。1 年生の時からずっと 1 人のクラスで生活してきた S にとって、初めて同級生ができることになった。私はその日の帰りの会に、そのことを S に話すことにした。

「来週、1 人転入生が来ることになったけど、席の並びはどう並んだらいいと思う?」

独り言になることを半ば覚悟しての問いかけだったが、意外にも S が口を開いた。

「席は、横に並んで座りたい。」

「えっ!? 今、何て言ったの?」

「2 人で並ぶようにしたいってこと!」

「そうか、じゃあそうしよう。ところで確認だけど、教室の後ろの壁際でなくて、真ん中ぐらいに 2 人で並ぶってことでいいのかな。」

「いいよ。」

「聞いてもいいかな。何で後ろの壁際に座ってたの?」

「・・・」

「無理に答えなくてもいいんだけど。」

「去年の授業で夏休み過ぎから、教科の先生みんなとケンカして、その度に後ろに下がってって、もうそれ以上下がれなくなった。」

「あっ、そうだったんだ。でも、よく話してくれたね。」

それ以降 S は、一気に堰を切ったように会話をしてくれるようになった。私は、彼女と相談しながら、係の分担や朝・帰りの会のプログラム、掃除分担などを決めていった。

話ができるようになったポイントはどこにあったのだろうか。今思うとそれは、私が座席を一方的に提案せずに、S の考えを聞いたところにあったのではないかと思う。幼児期から経験した様々な負の体験によって、いつしか大人を信頼できなくなった彼女は、特に、大人に何かを押し付けられることに強い拒否感を

持っていた。だから、私が担任としてどう接するのかを彼女は 2 か月ほど観察していたのではないだろうか。

転入生が来ることになって、座席の配置を考えることになった時、もし、私が一方的に提案していたら、S はそれを押し付けと捉えて、それ以降ずっと私と話ができる関係性を拒否し続けることになったかもしれない。しかし、私が彼女の考えを聞くこととしてしたことによって、彼女は、私との間にある「扉」を向こうから開けてくれたのだ。

私は、若い頃にある先輩の先生から教わったことを思い出していた。「生徒たちとの間には信頼の扉があって、そこには鍵がかかっているんだけど、その鍵は向こう側の生徒たちしか持っていないんだよ。」

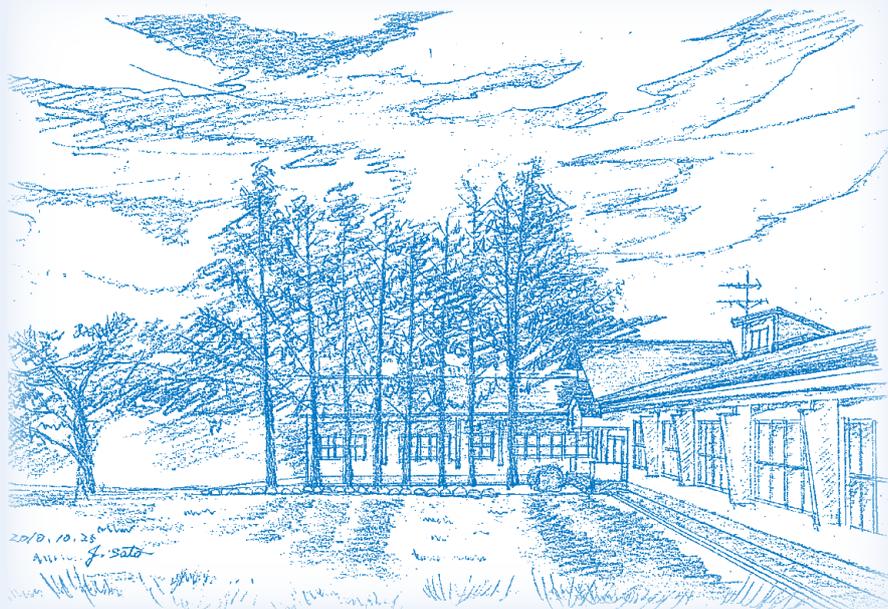
後日談だが、それから 1 ヶ月ほどして、県知事が開校した分校の視察に来ることになり、私も 2 年生・社会科の平常の授業を見せることになった。当日、県知事が教室に入って来て、S の後ろで見学し始めた直後に、S がつぶやいた。

「知事が来るなんて、授業のジャマだし!」

大きな声ではなかったが、私には聞こえるつぶやきだった。

私は、「なんて素直に自己主張するヤツだ!？」とビックリしたが、咄嗟のことでフォローもできず、しかたなく聞こえないふりをするしかないのでした。

(J)



IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。

<http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html>



QRコードは
こちらから!

